大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。

第2回

英語はなぜ難しいのか
――「知識を持っていること」と「知識を使えること」



日本人が英語で犯しがちな間違い

このコラムを読んでくださっている読者は英語を習得しようとする強い意欲を持って、英語に関する本をたくさん読まれていることと思う。特に、日本語学習者がよく間違える表現の例をたくさん載せた本は、「アルアル」の連続で、自分もそういう間違いをしょっちゅうしているところがちょっとイタイのだが、同時に笑ってしまうし、「正しい英語表現」を教えてもらって「そうなのか。わかった！ これで次から間違えない」と喜ぶ。

その類の数ある本の中で不朽の名作といってよいのがマーク・ピーターセン著『日本人の英語』（岩波新書）だと個人的には思っている。日本人のおかしな英語をユーモアたっぷりに指摘し、英語では正しくはこうだ、と示すだけでなく、その背後にある「英語の理屈」をわかりやすく解説してくれる。例えば、日本人が究極的に苦手とする冠詞の間違いに関して、“Last night, I ate a chicken in the backyard.”という日本人の友人が書いた文をあげて、その気持ち悪さを絶妙な筆致で書いている。ネイティブ英語話者には「生きた鶏をそのまま食べる」というグロテスクな光景が目に浮かぶのだそうだ。

日本語の英文法書では不定冠詞aを「名詞にaをつけるかどうか」の問題として扱うが、名詞にaをつけるという考え方は英語には存在しない。ピーターセン先生は「先行して意味的カテゴリーを決めるのは名詞でなく、aの有無である。そのカテゴリーに適切な名詞が選ばれるのはその次である」と書いている。

これは実に深い言説で、英語の可算・不可算という概念の本質を端的に述べている（ことが今ならわかる）。しかし、最初に読んだときは（アメリカで大学院生をしていたときだ）、記憶に残ったのは生きた鶏をむしゃむしゃ食べる光景だけだった。そもそも当時は、字面は書かれていたことをふむふむと理解したつもりであったが、実は英語の可算・不可算の概念についてちっともわかっていなかったのだ。

可算・不可算や冠詞の使い分けが苦手な理由

可算・不可算文法の定義は非常にシンプルだ。数えられるものは可算名詞、数えられないものは不可算名詞に分類され、可算名詞で1つならa、複数なら語尾にsをつける。不可算名詞には何もつけない。ただ、それだけである。そう説明されれば、中学生でも一瞬のうちに理解したと思う。しかしそれにもかかわらず、“I ate a chicken”のような気持ちの悪い英語を思わず話してしまう理由は、私たちの心の中に次のようなことが働いているからだ。

① 英語の可算・不可算文法に通底する（ピーターセン先生が言うところの）「意味」が理解できていない。つまり、可算・不可算文法の「スキーマ」を持っていない。

② 英語の可算・不可算の概念につ

1805_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 82-83 2018/03/19 16:34

いての「スキーマ」がないので、それぞれの名詞が可算の意味で使われているのか、不可算の意味で使われているのかに注意を向けることができないため、いくら英語を聞いてもスルーしてしまう。その結果、個々の名詞が主に可算名詞として使われるのか、不可算名詞として使われるのかを覚えることができない。

③　可算・不可算を明示することが身体の一部になっておらず、かつ意識も向けないので、英語を話したり書いたりするときに(話す、書く)名詞に冠詞をつけず、複数形にもせずに裸のまま使ってしまう。あるいは意味を考えずに、何にでも機械的にaをつけてしまい、“I ate a chicken”のような文を言ったり書いたりしてしまう。

物事を認識する際に働く「スキーマ」とは

「スキーマ」というのは認知心理学の鍵概念で、ひと言で言えば、「ある事柄についての枠組みとなる知識」のことを言う。私たちには、外界で起こっている出来事、文字に書かれている情報、耳から入ってくる人の発話などは、すべてスキーマのフィルターを通して入ってくる。スキーマによって、現在自分が置かれている状況下で何が大事かを判断し、情報を取捨選択するのである。目の前の状況には、非常に雑多な情報が大量に存在している。さまざまな服装をし、さまざまな持ち物を持っている多くの人がいて、絶えず視野に入っては消えていく。それらのすべてに目を向け、覚えることは到底できない。新聞を読んだり、人の話を聞いたりするときも、そこで使われた単語全部、文章全部を記憶することはとてもできない。

実際、私たちは見たり聞いたりした情報のほとんどを記憶していない。例えば、500円硬貨の実物を見ずに正確に描ける人はほとんどいない。硬貨は毎日何回も、通算すれば何千回、何万回と見ているはずだが、そこに描いてある図柄にはほとんど注意を向けないからだ。人は、注意を向けないものは、何度見ても正確に記憶することがない。何が大事な情報であるかを見極め、注意を向けるか向けないかを決めるのが、スキーマなのである。毎日見慣れている硬貨でさえ、その詳細は全然覚えていない。これがスキーマを持たない外国語なら推して知るべし、である。



英語と日本語で異なる「スキーマ」

さらにやっかいなのは、私たちは、英語のスキーマを持たないだけでなく、日本語を効率的に情報処理し、理解するためのスキーマを持っていて、それを無意識に英語に当てはめてしまうということである。日本語が可算・不可算を概念として区別しないわけではない。しかし、日本語での可算･不可算の区別のしかたは、英語と根本的に違う。つまり、英語話者のスキーマと違う(英語の観点からすると「誤った」)スキーマを持っていて、それを気づかないうちに英語を学ぶときに使ってしまうので、どんなにたくさん英語を聞いても読んでも、大事なところはザルに水を入れるように流れ去ってしまい、英語のインプットが記憶として定着しないのである。

日本人の可算・不可算についてのスキーマは、英語とどのようにずれているのだろうか。まず、どの名詞が可算でどの名詞が不可算か、というところですでに食い違いがある。イヌや自動車やコップが可算名詞で、水やミルクが不可算名詞なのは日本人でもすなおに納得できる。しかし、『オックスフォード現代英英辞典』によると、キャベツ、レタスは可算・不可算両方、とあり、ブロッコリー、カリフラワーは不可算名詞と書かれている。この「両方」はクセモノである。どっちでもいいよ、ということではないからだ。“a chicken(可算)”と“chicken(不可算)”をきちんと使い分けないと、ネイティブの英語話者にすごく気持ちの悪いことを言ってしまうのと同じように、キャベツが可算か、不可算かは話者が今は「数えることに意味がない塊」と見たいか、「一つ一つを別個の個体として見たいか」によって決まる。ピーターセン先生が「先に意味がある」というのはまさにこのことなのだ。

抽象名詞の可算・不可算はさらにやっかいだ。抽象概念は目に見えないのにもかかわらず、名詞によって可算・不可算が「ほぼ」決まっている。ideaはほとんど可算として使わ

1805_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 84-85
2018/03/19 16:34

れ、one idea, two ideasのように数えることができる。これは日本語でも「よいアイデアをたくさん思いついた」というので、ideaが可算名詞であることには納得できる。しかし同じように「たくさんの証拠がある」というから、evidenceも可算名詞だと思いたいが、こちらは不可算名詞で、どの文脈でもevidencesということはまずない。英語話者の抽象名詞の理解は、その名詞が可算・不可算のどちらであるかと切り離せないのである。

英語の可算・不可算文法を理解し、使いこなすには、それぞれの名詞が典型的には可算名詞、不可算名詞のどちらであるかということを知ることが必要だが、それだけでは足りないのだ。英語ネイティブの人たちは可算から不可算にシフトしたり、不可算から可算にシフトしたり、「この名詞は可算名詞」と知っていても、意図的に外すようなこともするのである。例えば、bookは可算名詞であるが、本を食べる虫の視点で食べ物として本を語るときは、bookをわざわざ不可算名詞として使うこともある。逆にknowledgeはほとんどの場合、不可算名詞で、特定の知識要素のことを言うときにはa piece of knowledgeとする。しかし、最近書いた論文を校閲してもらったら、校閲者がknowledgeをわざわざ“a knowledge”と直してきた。これにはびっくりして、「knowledgeは不可算でしょ、この修正、間違いですよね」と抗議したところ、ここでは可算のほうがよい、と言われてしまった。これはネイティブにしか持てない身体感覚で、これの背後にあるのが、「スキーマ」なのである。

私たちは皆、母語のスキーマで物事を捉えている

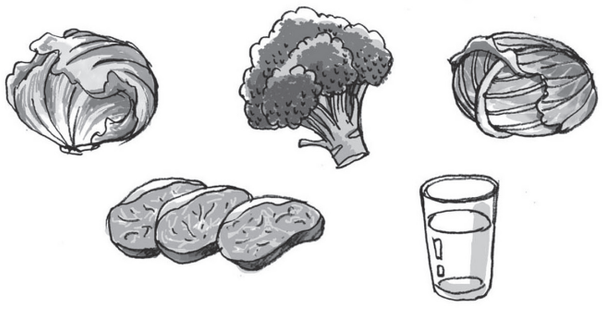
このように、可算・不可算のスキーマは、英語母語話者は無意識のうちに自由に運用することができるが、日本人が英語を学習するうえでは、根本的な影響を及ぼすものとなる。先ほど述べたように、日本人の英語学習者は、「可算・不可算」のスキーマがないため、英語のインプットを受けるときに、それぞれの名詞が可算名詞であるか、不可算名詞であるかということに注意を向けることをしない。硬貨を何度見ても、ディテールに対して注意を向けなければその細かいデザインはほとんど記憶されないのと同じように、名詞が文の中でどのような形で現れるか――つまりaと一緒に現れるか語尾がsで終わるか、あるいはaやsと一緒には現れず、裸で使われることが多いか――に注意を向けないと、その名詞が可算名詞なのか不可算名詞なのかを覚えられない。

英語を母語として学習する子どもは、「可算・不可算文法の意味」を理解するようになる前にまず、「名詞が現れるときの形の違い」に気づく。名詞の文法上の形態に注意を向けることは、単語の意味を考えるようになる前に始まっていて、名詞を学習するときには、必ずその可算・不可算の形態ごと塊として覚えるようになる。形態と一緒に覚えた名詞のストックがある程度記憶に貯まって初めて「可算・不可算文法の意味」――つまり、aで始まるかsで終わる形で現れることばは個体が単位となって「数える」ことができ、aと一緒に現れることなくいつも裸で現れる単語は、それ自身が数える単位を持たない「数えられない」ことばであること――を自分で発見する。

日本語のスキーマが英語学習に及ぼす影響

それに対して、日本語ではそもそも可算・不可算という基準では名詞を文法的に分類しない。名詞を分類するのは助数詞（個、枚、本など）であるが、助数詞は、「数えられる対象」と「数えられない対象」を明示することはない。英語では不可算名詞に対してのみ“a cup of water” “a slice of meat” “a pinch of salt”のように量詞をつける。つまり、水、肉、塩など、自身で数える単位を持たない（つまり数えられない）対象を、量詞によって数える単位を明示して数えるのである。

助数詞も理屈は英語の量詞と同じで、数える単位を明示する。しかし、英語の場合と違って、日本語の助数詞は動物や自動車のように明らかに「数えられる」モノに対しても、水や



1805_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 86-87 2018/03/19 16:34

バターのようなものに対しても使われる。つまり、その名詞を数える単位を外から与えられなければ数えることができないという英語の基準で考えると、日本語のすべての名詞は英語の不可算名詞と同等に扱われているということになる。しかも、日本語では助数詞は数と一緒のときにしか使われず、数を言う必要がないときは、「コンピュータは書斎にあります」というときも「マヨネーズは冷蔵庫の中にあります」というときも、ともに名詞を裸で使う。

このため、私たち日本語話者は、名詞を使うときに、可算・不可算文法にのっとろうとしても、その名詞の可算・不可算をついつい自分の感覚で推測してしまう。日本語の感覚としてはレタスもキャベツもブロッコリーもカリフラワーもジャガイモやトマトと同様に1個、2個、3個と数えられるモノなので、当然可算名詞だと思う。証拠も1つ、2つ、と数えられるから、証拠に対応するevidenceも当然数えられると思ってしまうのである。

つまり、日本人は可算・不可算文法を学習するときに、二重の意味で母語の影響を受ける。母語において「数えられる、数えられない」という観点で自動的に名詞を分類する文法を持たないので、英語のインプットに対して、名詞の形態に自動的な注意を向けることをしない。注意を向けないので、名詞を聞いてもその可算・不可算を記憶することができない。さらに、それぞれのモノに対する可算・不可算の認識が母語の影響で英語母語話者とずれてしまっている。こういうメカニズムが働くために、私たち日本語母語話者にとって英語の可算・不可算文法は習得が非常に難しくなってしまっているのだ。



「持っている」知識を「使える」知識に変えるための心がけ

evidenceは不可算名詞であってideaは可算名詞であるなどの英語に関する基本的な知識はもちろん知っておく必要がある。そのためにいろいろな参考書を読んで覚えることは大事だ。しかし「知識として持っている」ことと「知識として使える」ということは同じではない。野球の本を何冊も読んで、野球のバッティングのセオリーをいくら知っていても試合でヒットやホームランをすぐ打てるわけではないのと同じで、英語が使えるようになるためには、知識を頭で知っているだけではなく、身体に落とし込む必要がある。

では、身体に落とし込むにはどうしたらよいだろうか。私自身は英語で文章を書くときには名詞を書くたびに意識的にそれが可算か不可算かを考えるようにしているが、ひととおり文章を書いてしまったあとで文を見直し、冠詞だけ別にチェックするようにしている。普通に文の見直しをするときは、文やパラグラフの内容に注意が集中し、定冠詞や不定冠詞、複数形など細かい文法の要素は見落としてしまいがちだからである。可算・不可算が不確かな場合には辞書を引くようにしているが、辞書ではわからないことも多い。そういうときには英語ネイティブの友人に確認することにしているが、最近では、インターネット上で無料で使えるコーパスも多用している。いずれにせよ、可算・不可算文法で間違いをしなくなるようにするには、英語は可算、不可算の区別を必ずつけること、名詞が可算か不可算かは自分の感覚に頼ってはいけないことをいつも頭においておき、意識的にチェックする習慣をつけることが大事だ。

このようにして、最近は学生の書いた英語を読んで、可算名詞が裸で書かれていると気持ち悪くてしかたがない境地になってきた。心理学で人の心の情報処理の仕組みや思考のバイアスを知っていることは、英語の学習にとても役に立つのである。

次号予告

第3回 英語の学習を始めるのによい時期とは

1805_bizcom_082-089_CognitiveS.indd 88-89 2018/03/19 16:34